

リーダーたちの本棚

Leaders as Reader

NO.135

L

変化はチャンス
スピーディーに
対応していく

【率いる】
Leading

「あなたと、コンビニ、ファミリーマート」というコーポレートメッセージのもと、人と地域に寄り添う店舗づくりを国内外で展開しているファミリーマート。創立40周年の節目に社長に就任した細見研介さんは、抱負をこう語る。

「社会のあり方が激変している中で、大事な節目を迎えます。新型コロナウイルスの感染拡大により、テレワークが増え、都市部から人が減り、外食が減り、家での食事が増えています。変化のスピードはデジタル化とあいまって加速しており、コンビニ、スーパー、ドラッグストア、さらにはeコマース間の競争が激しくなっています。この変化をチャンスと捉え、地域それぞれに異なるニーズ、多様化するライフスタイルにスピーディーに対応していきたいと考えています」

40周年に向けたチャレンジとして「40のいいこと!?」というキャンペーンを始動。「もっと美味しく」「たのしいおトク」「食の安全・安心、地球にもやさしい」などのテーマを掲げ、オリジナリティーのある提案をしている。例えば「ファミマフードドライブ」は、家庭で余った食品(未開封で破損していないもの)。賞味期限まで2カ月以上あるもの。常温保存のもの)を店舗で回収、自治体やNPOなどと連携して支援が必要な人々に届ける仕組みで、子どもの食支援や食品ロスの削減に寄与している。

店舗のデジタル化にも力を入れる。無人決済システムの導入店では、手に取った商品の金額が店内のカメラや棚の情報から計算され、セルフで迅速に会計を済ませることができる。「新型コロナウイルスの感染拡大による大きな変化の1つが“非接触”へのニーズの高まりです。無人決済システムは、非接触や時間短縮に加え、省人化を可能にするので、店舗オペレーションの負担軽減にもなると期待しています」

地域の拠点としての機能を強化

コンビニの未来像について、細見社長は次のように語る。「“地域の拠点”としての役割が一層増していくと思います。例えばファミリーマートの子会社シニアライフクリエイトは、現在400カ所の市町村行政から業務委託を受けてシニアに向けたお弁当の宅配を行い、約10万人のお客様にご利用いただいています。例えばご高齢でもお元気であれば、ファミリーマートをお弁当の受け取り拠点にいただくことで、毎日の運動や健康づくりの応援ができると思います。規制緩和が進めば、薬の受け取りなどの機能も果たせるかもしれません。そうした1歩踏み込んだ独自の提案を模索していきます」

細見社長の若き日は、「単身でガンガン営業をかけるタイプ」だったとか。やがてチームワークの強さを覚え、40代にはアメリカのブランド「レスポートサック」の買収に成功した。

「3年がかりのマラソン交渉で非常に苦労しましたが、あらゆるルートを使って買収に臨み、全世界の高標権と販売権を取得。絶対にあきらめないことの大切さを学びました」

挑戦している時がいちばん楽しいと語る細見社長。好きな言葉は、「Go where nobody has gone. Do what nobody has done. (誰も行ったことのないところに行け。誰もやったことのないことをやれ)」。経営信条でもあるという。



ほそみけんすけ
細見研介 さん
ファミリーマート
代表取締役社長

1962年大阪府生まれ。86年神戸大学経営学部卒。同年伊藤忠商事入社。ハンティングワールドジャパン取締役、伊藤忠商事ブランドマーケティング第3部長、同第2部門長、執行役員食品流通部門長、執行役員第8カンパニープレジデントを歴任。2021年3月から現職

R

【読む】
Reading

人生のキーワードは「旅」と「冒険」

ファミリーマートは、今年9月に創立40周年を迎える。この節目の年に社長に就任した細見研介さんは、伊藤忠商事の主に繊維部門で営業やブランドマーケティングの実績を重ねた。若い頃から旅や冒険が好きで、これまでに訪れた国は約50カ国にのぼる。その原点は、少年時代の読書にあるという。

冒険物語に魅せられ 情熱をかき立てられた

ファミリーマートの社長に就任する以前は、親会社の伊藤忠商事にいました。商社に入ったのは、世界を見てみたいという心の欲求があったからです。その原点は、少年時代の読書だったと思います。図書室の本のほとんどに目を通す

ほと読書が好きでした。気に入って何度か読んだのは、「ツバメ号とアマゾン号」(岩波少年文庫)。イギリスの4人きょうだい(ツバメ号)が小舟に乗って無人島を冒険する物語です。改めて振り返ると、「旅」や「冒険」は私の人生のキーワードで、高校生の時には冒険家として知られる植村直己さんの自伝「青春を山に賭けて」に若い情熱をかき立てられました。植村さんの青春時代は、ほぼ無一文でアメリカに

渡って農園仕事に汗を流したり、スキーが得意なのにフランスのスキー場がむしやりに働いたり、冒険費用を稼ぐところからチャレンジの連続。その行動力とビュアな冒険心は、今読んで心引かれます。

「アルケミスト 夢を旅した少年」は、人生のエッセンスが詰まった旅の物語。主人公の少年は、ピラミッドの近くに眠る宝物の夢を見てエジプトに旅立ちます。道中多くの困難がありますが、錬金術師(アルケミスト)から「前兆」に従うことを学び、宝物の正体を知ります。「前兆」はあらゆる出会いや経験を示唆していて、自分を取り巻く全てのことに何かしらの意味があり、今を懸命に生きれば、不運さえも夢の実現を助けるというストーリーです。30年以上前に書かれた名著ですが、コロナ禍に苦しむ今の私たちに、ポジティブな生き方を示してくれているように思います。

湯船に浸かりながら モノの歴史を1点ずつ

「100のモノが語る世界の歴史」は、大英博物館が所蔵する100点のモノを通じて世界の歴史を旅することができます。全3巻のシリーズです。元同館館長のニール・マクレガーによる解説は読み

応え十分で、私は湯船に浸かりながら毎日1点ずつ繰り返し読んでいます。最近テレビで、イギリスのサットン・フー遺跡を巡る実話に基づいた「時の面影」というドラマを見たのですが、サットン・フーで発掘された黄金の甲冑について本書で読んでいたので、ドラマをより楽しめました。本書で扱うモノは、質素な道具から偉大な芸術作品まで幅広く、人類の営みを想像させます。例えばタンザニアのオルドゥヴァイ峡谷から出土した180万〜200万年前の石のチョッピング・ツール(石器)は、石の塊を別の石に打ち付けて刃のような断面にしてあり、肉を切ったり骨を砕いたりしたと想像できます。同じ峡谷から発見された120万〜140万年前の掘り棒は、先の石器よりも加工が精緻で、著者は言語の発達加工技術の伝承につながったと推測しています。今はITテクノロジーの発達によって人を介さない技術の伝承が可能な時代です。となると、人づてに伝わる文化はもはや退行期にきているのではないかと、ふとそんなことも考えました。本書をきっかけに、旅好きが高じてオルドゥヴァイ峡谷にも行ってきました。サバンナの風景は不思議と懐かしく、人類発祥の地ともいわれる場所でデジャヴのような感覚を味わいました。

好きなワインの本など、趣味に関する読書も多いです。最近のお気に入りには、ニューヨークの街を撮り続けたソール・ライターの写真集。ニューヨークは商社時代に何度も赴いた大好きな街。街への愛情が感じられるライターの写真は、見ているだけで優しい気持ちになります。私は長く単身赴任生活が続いていて、今年で11年目。週末のひとりの時間は、料理をしたり、ペランダの植物の世話をしたり。あとはやっぱり読書です。(談)

細見研介さんのおすすめ本棚

「青春を山に賭けて」
(文春文庫) 植村直己・著
無一文で日本を出た著者が、五大洲最高峰登頂に成功し、アマゾン筏下りを成し遂げるまでの青春記。過酷なまでの試練に次々と挑戦した男の探検と放浪の日々。

「アルケミスト 夢を旅した少年」
(角川文庫) パウロ・コエリョ・著
山川誠矢・山川亜希子・訳
宝物が隠されているという夢を信じてエジプトを目指した少年サンチャゴが、アルケミスト(錬金術師)の導きと様々な出会いの中で人生を学んでいく物語。

「100のモノが語る世界の歴史1 文明の誕生」 全3巻
(筑摩選書) ニール・マクレガー・著
東郷えりか・訳
物には固有の来歴がある。その痕跡を子細に見てゆくと、歴史の知られざる一面が現れる。大英博物館の所蔵する至宝から精選された100点でたどる人類の歩み。

「フランシーとズーイ」
(新潮文庫) サリンジャー・著
村上春樹・訳
名門の大学に通うガラス家の美しい末娘フランシーと俳優で5歳年上の兄ズーイ。ズーイは才気とユーモアに富む渾身の言葉で自分の殻に閉じこもる妹を救い出す。

「逃げない」
70の講義 (PHP研究所) 唐池恒二・著
部活動のキャプテンに始まり、観光列車の開発、外食事業の躍進、悲願の新幹線開通、世界一の豪華列車の実現など様々なシーンで活躍した著者のリーダー論。



サリンジャーの「フランシーとズーイ」は、村上春樹氏の訳が秀逸です。エゴだらけの世界に憤り、宗教書に救いを求め、知的な階層に迷い込む大学生のフランシー。その苦悩がわかるからこそ、言葉を尽くして妹を救おうとする兄のズーイ。メタファーを駆使して両者の心情を天衣無縫に綴る文章は、まるで絵画のよう。妹を思う兄の優しさが繊細に描かれた小説で、いつ読んでも心が温かくなります。